

13課

6月25日

イスラエル、エジプトへ



安息日午後 6月18日

暗唱聖句

イスラエルは、エジプトの国、ゴシェンの地域に住み、そこに土地を得て、子を産み、大いに数を増した。(創世記 47:27、新共同訳)

さてイスラエルはエジプトの国でゴシェンの地に住み、そこで財産を得、子を生み、大いにふえた。(創世記 47:27、口語訳)

今週の聖句

創世記 46章、ローマ 10:12、13、創世記 47章、創世記 48章、
使徒言行録 3:25、26、創世記 49章、フィリピ 2:10、創世記 49:29～50:21

今週のテーマ

創世記はヤコブとヨセフが共に暮らした最後の年月までを記録しています。ヤコブ（イスラエル）はエジプトに終の棲家^{すゐか}を構えるために（創47章）カナンを離れます（同46章）。そしてそこで息を引き取ります（同49:29～50:21）。そして、エジプト人の生活様式の中にあってもなお、彼の目にはあの約束の地の面影が、その背後に大きく、そして確かに見えていたのです（同50:22～26）。

ヤコブはエジプトに着くとすぐにファラオを祝福します（創47:7～10）。こうして、（もちろん部分的にはありますが）諸国民の祝福となるとのアブラハムに与えられた約束が成就するのです（同12:3）。後に死期が近づいたヤコブは、ヨセフの息子たちを祝福し（同48章）、また自身の息子たちも祝福します（同49:1～28）。そしてそれは、未来のイスラエルの十二部族の文脈の中で、1人ひとりについての感動的な預言ともなります（同49:1～27）。

しかしながら、事実、流浪の旅に「明け暮れ」、エジプトでは寄留者であったイスラエルは、常に約束の地への希望を生きがい^{いきがひ}に生き抜いたのでした。創世記はエジプトに住むイスラエルの子らの姿をもって終わりますが、ヨセフの最期の言葉はもう一つの場所「約束の地」を指し示しています。「わたしは間もなく死にます。しかし、神は必ずあなたたちを顧みてくださり、この国からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた土地に導き上げてくださいます」（創50:24）。

問1 創世記46章を読んでください。ヤコブのカナンからの旅立ちの意義は何ですか。

ヤコブがカナンの彼の場所を離れるにあたって、彼は希望に溢れていました。もう飢えることはないとの確約とヨセフが生きているとの良い知らせは、ヤコブが約束の地を離れる決心をする後押しとなったことでしょう。

ヤコブの旅立ちは、アブラハムのそれを彷彿させます。アブラハムの場合は、約束の地に向かう旅でしたが……。ヤコブは、アブラハムが神から聞いたのと同じ約束を聞きます。すなわち、彼を「大いなる国民」にするとの約束です（創46：3を同12：2と比較）。神のヤコブへの召しは、アブラハムと結んだ神の契約の追想でもありました。これら二つの召しの両方で、神は同じ確証の言葉として、「恐れてはならない」（同46：3を同15：1と比較）と語られます。それは栄光に満ちた未来を約束する言葉でした。

彼の娘たちを含む（創46：7）、エジプトへ行ったイスラエルの子ら全員の名簿は、神が、アブラハムがまだ子どもがいないときに彼に約束された子孫繁栄の約束を思い起こさせます。（ヤコブ、ヨセフ、そして彼の2人の息子を含む）「七十」という数は、完全性を表します。それは、「すべてのイスラエル」がエジプトへ行くことを意味します。この「七十」という数字が諸民族の数（創10章）とも一致することには、重要な意味があります。なぜなら、このヤコブの旅にすべての民族の運命がかかっていたことを示しているからです。

この真理は、その後多くの年月を経てさらに明らかにされます。すなわち、[その約束は] 十字架と、さらに多くの救いの計画の啓示の後に、アブラハムの子らだけでなく、至るところに住むあらゆる人類に及ぶことを意味するのです。

言い換えれば、アブラハムの子孫であるこの家族の物語がどれほど興味深いものであっても、また私たちがそれらからどんな霊的教訓を学ぼうとも、それらの記述は「神の御言葉」の一部なのです。なぜなら、それらは人類救済の歴史の一部であり、この墮落した惑星に住む、できる限り多くの人々に贖い（あがな）を届けるための神のご計画の一部だからです。

「ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。『主の名を呼び求める者はだれでも救われる』のです」（ロマ10：12、13）。パウロはここで、福音の普遍性について何を語り、さらに、私たちが教会として福音を宣教する上で必要などんなメッセージを語っていますか。

非常に興味深いことに、ヤコブは、ヨセフがエジプトで生きていと聞かされてもなお、主は「その夜、幻の中で」(創46:2) 彼にカナンを去るよう命じられます。ヤコブは約束の地を去り、〔定住の地として〕すべての地の中からエジプトを選びます。その地は後に、神の民が戻るべきでない一つの地となります(申17:16)。

問2 創世記 47 章を読んでください。ここに私たちはどんな霊的な真理と原則を見いだすことができますか。

「ヨセフは、兄弟たち5人をパロに会わせるために連れてゆき、将来、家建てる土地の許可をもらおうと思った。パロは総理大臣ヨセフに感謝の念をいただいていたから、彼らをエジプトの名誉ある公職につかせることもできたであろう。しかし、ヨセフは兄弟たちが主の真の礼拝を忠実にやり、異教の王宮で誘惑にさらされることがないようにしようと思った。そこで、王から質問された場合、正直に自分たちの職業を明かすように兄弟たちに助言した。ヤコブのむすこたちはその助言に従い、自分たちはこの地に寄留するために来ただけで、永住するつもりはないことを注意深く説明し、必要なときにはこの地を離れることができる余地を残しておいた。王は、彼らに住むところを与え、『地の最も良い所』であるゴセンの土地をおくった」(『希望への光』116ページ、『人類のあけぼの』上巻261ページ)。

賢明にもファラオは、この寄留者を、主人の気前の良さに甘える物乞いにはせず、彼らがこの新しい環境に順応するために、彼らの「仕事」を尋ねます(創47:3)。彼はまた、彼らの専門である牧畜を生かして、ファラオの「家畜の監督」(同47:6)をさせることまで提案します。

こうして、異邦人であり、身分の低い者であり、よそ者であるヤコブが、この国の首領の前に立ち、聖書が語るように、「ファラオに祝福の言葉を述べた」(創47:7)のです。卑しいよそ者である彼が、**強国エジプトの支配者であるファラオを祝福する者**となりました。なぜでしょうか。

「前に立たせる」(アーマド・リフネイ)(創47:7)という動詞は、通常、祭司に用いられます(レビ14:11)。古代エジプトでは、ファラオは最高位の祭司の地位を持っていたことを考えると、ヤコブは、霊的な意味で、ファラオよりも高い、エジプトの最高位にある祭司よりもさらに高い地位に立ったのです。

私たちは「選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民」(1ペト2:9)である以上、信仰が求める義務として他者にどのように接するべきですか。

ヤコブは死期が近づいたとき、若い頃ベテルに戻ったことを思い出します（創35：1～15）。その時、神はアブラハムに与えた（同17：8）「永遠の所有地」（同48：4）の約束を更新されます。ですから、約束の地の希望は、死が間近であることを感じた彼にとって、心の内に希望を守り育む慰めの想いであつたのです。その後、ヤコブはエジプトで生まれたヨセフの2人の息子に会い、彼らを祝福します。しかし、それは彼自身の子孫についての未来の約束という文脈の中でなされた行為でした。

問3 創世記 48 章を読んでください。ヤコブはここで、なぜ他の孫たちでなく、ヨセフの 2 人の息子を祝福したのでしょうか。

ヤコブは孫たちの中で、ヨセフの息子であるマナセとエフライムだけを祝福します。こうして彼らは、孫の地位から子どもの地位に高められます（創48：5）。ヤコブの祝福は、長男（マナセ）よりも弟（エフライム）が優れていることを意味しますが、それは本質的にはヨセフに向けられたものでした（同48：15）。

私たちはここに、過去における神の忠実さと同時に、未来における彼らのための神の約束についての〔ヤコブの〕個人的な証しを見ます。ヤコブはまず、常に食べ物と保護を備えられたアブラハムとイサクの神（創48：15）について言及します。その同じ神が、彼を「あらゆる苦しみから贖われた」（同48：16）ことを想います。ヤコブはまた、彼が格闘した（同32：29）「ベテルの神」（同31：13）を、そして彼の名をヤコブから「イスラエル」に変えられた神（同32：26～29）を心に想うのでした。

神が悪を善に変えられたすべての経験を思い起こしながらヤコブは想います。神は、彼とヨセフを守られたように、彼の孫たちの生活をも守ってくださるという現在の希望だけでなく、彼の子孫たちがカナンに帰るという未来の希望についても思いを馳せていたのでした。この希望は、彼がシェケムについて言及していることからわかります（創48：22、新共同訳）。シェケム（シケム）は彼が買い取った土地（同33：19）であるだけでなく、後にヨセフの骨が埋葬される地でもあります（ヨシュ24：32）、後に、イスラエルの各部族に土地が分配される地ともなります（同24：1）。彼の身に起きたすべての事の中にあつて、ヤコブは常に、この家族によって「地上の氏族はすべて……祝福に入る」（創12：3）と言われた神の約束を心に留めていました。

使徒言行録 3：25、26 を読んでください。ペトロによれば、創世記 12：3 の約束はどのように成就しますか。私たちもどのようにこの約束に預かることができるでしょうか。

問4 創世記 49：1～28 を読んでください。ヤコブの息子たちに与えられた祝福の意味は何でしょうか。

ヤコブは、近い将来のイスラエルの部族の行く末についての預言のかなたに、究極の救いの希望であるメシアを見えています。この希望はすでに、「後の日に」（創49：1）というヤコブの最初の言葉に示されており、それはメシアなる王（イザ2：2、ダニ10：14）の到来を示す技巧的な表現です。

この章は続いて、息子たち1人ひとりの未来の姿へと進んで行きます。これらの言葉は、神が決められた通りに彼らが生きて行くというような、あらかじめ定められた運命を意味しません。そうではなく、息子たちの性格についての表現であり、彼らの性格がその人生をどのように作るかを語っています。たとえば、神は、ある人が無実の人を殺すことをご存知ですが、しかしそれは、神がそのある人に無実の人を殺させたということとはまったく違います。

問5 創世記 49：8～12 を読んでください。ここにはどのような預言が与えられ、それはなぜ重要なのでしょうか。

人間の自由意志を超えて神は未来をご存知です。神はユダを通してメシアがおいでになることを前もってお決めになっています。ユダは（創49：8～12）、獅子にたとえられており（同49：9）、獅子は王位と称賛を意味します。ユダはダビデ王を生みますが、シロ、すなわち「平和」（シャローム）（イザ9：5、6、口語訳9：6、7）をもたらす者も輩出し、「諸国の民は彼に従」います（創49：10）。

ユダヤ人は長く、これはメシアの到来を示すメシア預言であると考え、クリスチャンもこの聖句はイエスを指すものと考えてきました。「もろもろの民は彼のもとに集まる」（創49：10、英語欽定訳）とあるのはおそらく、「イエスの御名によって……あらゆるものがひざをかがめ（る）」（ピリ2：10、口語訳）との新約聖書の約束の先駆けであると思われる。

エレン・G・ホワイトは次のように書いています。「森林の王者、ししはこの部族にふさわしい象徴であった。この部族からダビデがあらわれ、ダビデの子、シロすなわち真の『ユダの部族のしし』があらわれた。ついに、この地上のすべての権力は彼を拝し、全国民は彼をあがめるようになる」（『希望への光』119ページ、『人類のあけぼの』上巻266ページ）。

私たちはなぜ今、すべての民がそうする前に、イエスに忠誠を献げなければならないのでしょうか。

問6 創世記 49：29～50：21 を読んでください。創世記の結びとして、そこにどのような大いなる希望のテーマを見いだすことができますか。

創世記の結びとして、そこに三つの希望に満ちた出来事が書かれています。

その第一は、イスラエルが約束の地に戻るとい希望です。創世記の著者であるモーセは、ヤコブとヨセフの死とその埋葬を、約束の地を指し示すものとして描写しています。「イスラエルの十二の部族」(創49：28、口語訳)についての祝福と預言のすぐ後で、ヤコブは彼の死に先立って、息子たちに、カナンのマクペラの洞穴に彼を葬るよう命じています。そこはかつてサラが葬られた場所でした(同49：29～31)。物語風に描かれたカナンに向かう〔ヤコブの〕埋葬の行列の様子は、幾世紀かの後の、出エジプトの先駆けとなるのでした。

第二に、それは神が悪を善に変えられるとの希望を意味します。ヤコブの死と埋葬の後、ヨセフの兄たちは彼らの将来を心配します。ヨセフが彼らに復讐するのではないかと恐れたからです。彼らはヨセフのもとに行き、彼の前にひれ伏して、彼の僕になると申し出ます(創50：18)。この場面はヨセフの預言的な夢を思い起こさせます。ヨセフは彼らに、未来を保証する言葉(同15：1)である、「恐れることはありません」を用いて、再度兄たちを安心させます(同50：19)。なぜなら、彼らがたくらんだ「悪」を神は「善に変え」(同50：20)、さらに救いに至る出来事に変えてくださったからでした(同50：19～21を同45：5、7～9と比較)。それは、人の多くの欠点と過ちにもかかわらず、神の摂理はそれらすべての上に圧倒的な影響力を及ぼすことを意味します。

第三は、神が墮落した人類を救われるという希望です。創世記の最後に記されたヨセフの死の物語は、単なるヨセフの死以上の広い意味を持ちます。ヨセフは自分の骨をどこそこに埋めるようにとの指示をしていません。その代わりに、彼は、「神は、必ずあなたたちを顧みてくださいます。そのときには、わたしの骨をここから携えて上ってください」(創50：25)と言って、時を指示します。そして息子たちは、数十年後に彼の言葉の通りにします(出13：19参照)。究極の意味において、約束の地カナンは、救いと回復の希望、そして新しい天と新しい地に創られる新エルサレムの希望の象徴なのです。すなわちそれは、シロの死によって確かなものにされた希望、私たちすべての究極の希望の象徴です。

黙示録 21：1～4 を読んでください。私たちの最も大いなる希望であるこの約束なしに私たちは、あらゆる悩みの果てには死しかないという考えを置いて、どんな希望を持つことができるでしょうか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第21章「ヨセフと兄弟たち」の後半を読んでください。

「ヨセフの生涯はキリストの生涯を代表している。兄弟たちがヨセフを奴隷に売ったのはねたみからであった。彼らは、ヨセフが自分たちより偉大な者になるのを止めようと思った。彼がエジプトに連れていかれたとき、自分たちはこれ以上、彼の夢に悩まされることはない、これで実現の可能性は完全になくなったと得意がった。しかし、彼らの行動はすべて神の支配のもとにおかれて、彼らが妨げようとした出来事そのものを成就することになった。同じようにユダヤびとの祭司や長老たちは、人々の評判が次第にキリストのほうに傾くことを恐れてキリストをねたんだ。彼らは、キリストが王になることを妨げようとして彼を殺したが、かえって彼ら自身がキリストを王位につける結果をもたらしたのである。

ヨセフは、エジプトの奴隷になることによって、父の家族の救済者となった。しかし、このことは兄弟たちの罪を軽くするものではなかった。同じようにキリストは敵のために十字架につけられ、人類の贖い主、堕落した人類の救い主、全世界の支配者となられた。しかし、神がご自分の栄光と人類の幸福のために、摂理のみ手によって諸事件を支配されなかった場合と同様に、キリストを殺した人々の罪は、重かったのである。

ヨセフが兄弟たちによって異邦人に売られたのと同じく、キリストもまた、ご自身の弟子のひとりによって、最も憎むべき敵に売り渡された。ヨセフは、節操を守ったために、偽証によって牢獄に投げ込まれた。キリストも同じように、彼の自己否定の生涯が周囲の人々の罪に対する譴責となり、正しかったためにあざけられ、捨てられたのである。なんのところがもてないのに、偽証人の言葉によって罪に定められた。ヨセフが、不正と圧迫を受けても忍耐し、柔和であって、また無情な兄弟たちに対しても赦しと高貴で寛大な精神をあらわしたことは、悪人たちの嘲笑と悪意の中にあってもつぶやくことなく忍耐し、彼を殺害した者ばかりでなく、彼のもとに来て罪を告白し、赦しを求めるすべての者を赦す救い主を象徴している」（『希望への光』120、121ページ、『人類のあけぼの』上巻271、272ページ）。

話し合いのための質問

- ① ヤコブが死んだとき、ヨセフの兄たちはヨセフが復讐するのではないかと恐れしました。このことは彼らが捕らえられていた罪の呵責について、何を教えてくださいますか。またヨセフの応答は罪の赦しについて何を教えてくださいますか。
- ② ヨセフの生涯とイエスのそれとの間に、ほかにどのような類似点を見いだすことができますか。
- ③ 神は私たちの未来を事細かにご存知であることを考えるとき、それでもなお、私たちには選択の自由があると言えるでしょうか。

10年間祈り続ける

モスクワで英語を教えていたアメリカ人ボランティアのウィンストン・クロウフォードは、ロシア人の生徒の1人を安息日にアドベンチスト教会へ招待しました。

サーシャというその生徒は、礼拝には感動しなかったようです。無神論の家庭で育った彼は、実に退屈そうでした。

ウィンストンは悲しく感じました。「楽しんでいなかったのは間違いないから、彼を招待するのはもうやめよう」と自分に言い聞かせました。その代わりに、主がサーシャの心に触れてくださるようにと祈り始めました。

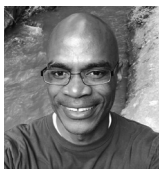
その後、ウィンストンとサーシャは、親交を深めていきました。サーシャは、フィンランド近くのカレリア地方の実家に休暇で帰省する際、ウィンストンを誘いました。ウィンストンは祈り続けました。1年のボランティアの期間を終えてアメリカに戻ったウィンストンは、その後もサーシャと連絡を取り続けました。数年後、サーシャがアメリカを訪問したときは、シカゴで一緒に時間を過ごしました。

ウィンストンはさらに祈り続け、10年以上が経ちました。ある日、サーシャがWhatsAppを通してメッセージを送ってきました。「聖書を読みたいんだ。助けてくれないかな?」ウィンストンは、「もちろん!」と喜んで返事をし、2人は1週間に1回、聖書を学ぶことにしました。

最初の学びの時に創世記1章29節を読み、サーシャは、神様が植物を食べ物として与えておられることに感動しました。彼はベジタリアンだったのです。彼は、それが良い習慣だと思っていたので実行していました。

「聖書に書かれていることだったなんて、思いもしなかったよ!」と、彼は言いました。その学びが終わる頃には、畏敬の念さえ抱いていました。「ブーシキンとドストエフスキーは読んだことがあったけど、聖書を読むのは何か違うんだ。言葉が僕に迫ってくる感じなんだよ」と、彼は言いました。

ウィンストンは元気づけられました。聖霊が御言葉を高め、サーシャの心に届けているのだと確信しました。学び始めてから3週間後、サーシャは学びを1週間に2回にしてほしいと言ってきました。ウィンストンは祈り続けました。



「出会って10年以上も過ぎてから、彼が聖書を読みたくなるだけでなく、一緒に研究する機会が与えられたことは、本当に感動的です。これは、神様がなされたことであり、完全に神様の御業です」と、ウィンストンは話してくれました。

(アンドリュー・マクチェスニー)